



イワクラ  
サミット  
in 宮崎

イワクラ(磐座)学会全国大会2005  
2005/07/16 (SAT)  
~07/17 (SUN)  
西郷原考古博物館大ホール

programs

## イワクラサミット in 宮崎

# 総 評

意味の深化がほしい

イワクラ(磐座)学会会長  
渡辺豊和

須田郡司の写真は美しいばかりでなく神々しい。今更ながらそう思った。須田はよほど「イワクラ」が好きなのである。彼には地球の表面が石庭に見えているのではないかとさえ感じた。ニワ造りでは一つ一つの石を据える行為が法悦なのだと言ふ。須田はイワクラに出会うごとに今もう一度それを据える自らの姿を

イメージするのではあるまいか。イワクラの存在をそのまま芸術として認知するのも現代に生きるイワクラの妙味であるがこれが宗教として活用し続けられるのはイワクラ本来の機能的いまといえるかもしれない。

巨石を雨乞岩として一九五二年まで活用していたという。えびの市西川北の菅原神社黒木克正宮司の報告はその意味でも極めて示唆に富んでいた。現在に至るも巨石による雨乞いが続いている場所があったら是非知りたい。雨乞いと直接関係あるかどうかは定かでないが黒木宮司との共同発表者谷口実智代の「霧島山東に北斗七星に並ぶイワクラ」は庄巻だった。霧島山東麓、南北ほぼ五〇キロの間に北斗七星を正確に写しとった七つの巨石遺跡があるとのこと。奈良県山添村で天の河とデネブなど夏の大三角形をこれも正確に写しとった巨石遺跡の存在を柳原輝明が見つけおおいに話題になった。柳原によれば北極星は勿論のこと北斗七星もみつつかつていて。ただ霧島山東麓のものの方がスケールが大きそうで

ある。それと北斗七星に対応する一つの巨石は神社にありどうみてもこつちの方が制作意図が明確に思える。これは日本に北斗七星信仰が根付いてからの遺構であろう。となると七世紀も後半以降ということになるが谷口はそう特定しているわけではない。これはたまたま南九州の古代を著述して北斗七星信仰に付き合っていたから私がそう感じたに過ぎない。谷口は北極星に対応する巨石もあるといった。山添村の北極星は今から四〇〇〇年前の北極星現在のトゥバンである。しかし霧島山東麓のものは現在の北極星であるから天体暦ではこちらの方が山添よりも新しい。いずれにしても谷口の今後の研究が愉しみである。

皆神隆「神奈川の巨石信仰」神奈川県にある目立った巨石信仰の紹介でありその縁起を要領よくまとめている。ただ巨石相互の位置関係については説明が少なく明解さに欠けるきらいがある。五万分の一の地図にプロットして考察してもらえばもう少し相対関係が見えてこよう。従来

からの皆神たちの研究は詳細克明緻密であるのに比べたら今回の研究の端緒といったおもむきでありこれからの展開を見守りたい。

皆神の発表と対称的だったのは国次秀紀「熱海海底遺跡にみた古代から中世期の港跡」。海底遺跡を克明に探索しかつて地上にあった当時の姿を復元するためにはこの上ない詳細な研究である。ただ今回の発表内容はゆうに一冊の本になるべき量のものでありそれを限られた時間で言述するために無理があった。これは単なる発表技術の問題にすぎないがやはり内容を海底遺跡探索とその成果だけに絞った方がよかつたのではないか。またその方が迫力もあつたであろう。とはいえこの研究がまとまりなるべく早く本として世に出ることを望む。

武内一忠「九州の巨石文化、ペトログリフが明かす一万年の超古代」。これも巨石遺跡相互の位置関係が明確でなくもう少しつっこんだ考察をしてきていたらもっと興味深い内

容になつていたのでと残念である。但し地球上を同じペトログリフの文字紋様をたずさえて巡行した一団の人々の存在を想定しその人々の日本における痕跡として阿蘇山を中心とした巨石遺跡を取り上げているのは充分ありうるので面白い。

佐藤光範「『磐座』から学ぶ」は極めて独自性の強い内容でコメントはさしひかえたい。

鈴木旭「月天子講と母系制社会への追憶」プロの著述家、巨石研究者が旅人としてみた古代物象に心をとらわれ、男性本位の神武神話一色の土地に考えてもみなかった女性本位母性優先の精神をかいまみる。まさにプロの紀行であり興味を呼ぶ。

磐座にとつてやはり大事なことは宗教信仰としてどうなのかということであろう。科学的解析もそのこととの関連性を無視しては成立しない。今年（二〇〇五）三月末に東京品川プリンスホテルを舞台とし全世界から著名宗教学者が参集した国際宗教学大会

で発表した論のうち最後の部分がそのことに触れているので今大会の総括のつもりで読んでいただければ幸甚である。

笠置山山頂の磐座は高さ一〇メートルはゆうに越す一枚岩が城壁状に環状に立ち並んでいる。ここは現代でも修験道場である。修験道は一面磐座信仰である。更に白石島では八八磐座の岩陰に観音像がまつられて四国八八カ所のミニ巡礼所となっている。従つてここでは一つ一つが聖所となっている。笠置でも白石でも現在まで巨石信仰が生きている。勿論縄文時代以来の宗教形態であろう。どうして磐座信仰だけが四〇〇〇年も五〇〇〇年もことによつては一年にわたる長い宗教形態をそのまま伝えてこれたのだろうか。巨石信仰は世界の何処にでも見られる。しかし高度科学技術時代の現代まで持続している例は少なくとも先進国では日本以外にみられないのではないか。この日本の特殊性をどう考えるのか。現代の磐座信仰は自然の造化としての巨石に対する畏怖に発している。

この心情は弥生時代以来変わってはいまい。しかし縄文時代の磐座信仰では人工築造に対する超人技術に対する驚異、畏怖が発端だったであろう。それが年月を経るにつれて、磐座を自然の造化に対する神の御技の顕現とみなすようになった。ところが現在ですら磐座には不思議な力を感じることが出来る。これが神の力なのであるか。

私は宗教者でないから神のことはわからない。しかし素直に私自身の神意識を考えてみたい。私達日本人に身についた神は八百万の神、すなわち多神でありしかも山川草木万物に一つ一つの神が宿るアニミズムである。結局一神教には縁がなかった。私自身学生時代にイギリス系の新教聖公会で洗礼を受けたがどうも一神教には馴染めず卒業後次第に教会から遠ざかりいまでは全く無縁になっている。私自身にも多神教やアニミズムが最も受け入れ易い。巨石に力を感じるのは必ずしも多神教やアニミズムとは繋がるとは思えないが無関係でもあるまい。磐座にとりつかれて来るとそれそのものが超越存在

に思われてくる。その思いが巨石にしめなわをまわすことになるのだからそれが拝むのも少しも不自然に思えないのである。神社の社の奥に御神体として巨大磐座が鎮座する西宮市の越木岩神社の甌岩は何もない社よりも拝み易い。気持ち自然と拝む方に向いていく。これは何なのか。超人的技術に神が隠れているのか。それとも磐座自体の神性なのか。巨石そのものが靈魂なのか。